

川柳の雑誌

麻生路郎★主宰



四月號

pensoj flugas trans la land - limon

Senryu Zasshi
No. 263

昭和二十二年七月一日第三回創刊
（毎月一冊、一頁發行）

（毎月一冊、一頁發行）

創刊大正十三年・通巻二百六十三號



金錢を詠んだ 川柳に就ての

座談

出席者

麻生路郎・中島生々庵
須崎豆秋・水谷鮎美
土井文蝶・種 瓜平
西垣錦風

路郎 川柳は社会を反映

一年にルンペンの石坂一作と

瓜平 処がその木の葉みたい

路郎 今頃解つてくれたんで

することが他の短詩形文
学よりも強いのが特徴だ
と言はれてゐるが、今日
は金錢の句を通じて色ん
な面白い話をして頂きた
い。明治、大正、昭和と
分けてどんな違ひが句の
上に現はれてゐるか一つ
豆秋君から

言ふ人が一万円を蓄めてゐた
と言ふので全國の新聞は最大
ニュースとして書きたてるし
松竹はこれを映画にし會我家
五九郎はこれを一座に引き入
れようとしたり、我社でも一
万円句会と言ふのを開いて全
一頁をこれに費したりした事
を思ひ出します。我々サラリ

瓜平 一万円で人間の命はど
れ位救けられるものでせうね
生々 しいや仲々一万円なん
て儲けるには大抵じやないで
すよ。

路郎 今頃解つてくれたんで
は………
鮎美 しいやーそうぢやないん
です。そりやあ先生、その当
時からよく句意は解つてゐる
のですが、更に私の胸を打つ
ものがあつたのです。

豆秋 十年一昔と言ひま
すがその十年間の貨幣價
値の変動と言ふものは驚
くばかりで十年前前には
十円は十円、百円は百
円の、一万円は一万円の
各々性格をハッキリと持
つてゐたように思ひます
が、今はもうメチャクチ
やでその性格を失つたた
めに自然それ等に対する
川柳もハッキリと出ない
と言ふことになつてゐる
やうに思ひます。昭和十

一年にルンペンの石坂一作と
言ふ人が一万円を蓄めてゐた
と言ふので全國の新聞は最大
ニュースとして書きたてるし
松竹はこれを映画にし會我家
五九郎はこれを一座に引き入
れようとしたり、我社でも一
万円句会と言ふのを開いて全
一頁をこれに費したりした事
を思ひ出します。我々サラリ
マンではとてもその当時の
一万円等にはおよそ縁が遠か
つたのでその時の先生の句に
一万円フンと云つて草に
寝る

（こゝで生々庵氏往診から
歸られて出席）
瓜平 一万円で人間の命はど
れ位救けられるものでせうね
生々 しいや仲々一万円なん
て儲けるには大抵じやないで
すよ。

路郎 今頃解つてくれたんで
は………
鮎美 しいやーそうぢやないん
です。そりやあ先生、その当
時からよく句意は解つてゐる
のですが、更に私の胸を打つ
ものがあつたのです。

豆秋 十年一昔と言ひま
すがその十年間の貨幣價
値の変動と言ふものは驚
くばかりで十年前前には
十円は十円、百円は百
円の、一万円は一万円の
各々性格をハッキリと持
つてゐたように思ひます
が、今はもうメチャクチ
やでその性格を失つたた
めに自然それ等に対する
川柳もハッキリと出ない
と言ふことになつてゐる
やうに思ひます。昭和十

一年にルンペンの石坂一作と
言ふ人が一万円を蓄めてゐた
と言ふので全國の新聞は最大
ニュースとして書きたてるし
松竹はこれを映画にし會我家
五九郎はこれを一座に引き入
れようとしたり、我社でも一
万円句会と言ふのを開いて全
一頁をこれに費したりした事
を思ひ出します。我々サラリ
マンではとてもその当時の
一万円等にはおよそ縁が遠か
つたのでその時の先生の句に
一万円フンと云つて草に
寝る

（こゝで生々庵氏往診から
歸られて出席）
瓜平 一万円で人間の命はど
れ位救けられるものでせうね
生々 しいや仲々一万円なん
て儲けるには大抵じやないで
すよ。

路郎 今頃解つてくれたんで
は………
鮎美 しいやーそうぢやないん
です。そりやあ先生、その当
時からよく句意は解つてゐる
のですが、更に私の胸を打つ
ものがあつたのです。

豆秋 十年一昔と言ひま
すがその十年間の貨幣價
値の変動と言ふものは驚
くばかりで十年前前には
十円は十円、百円は百
円の、一万円は一万円の
各々性格をハッキリと持
つてゐたように思ひます
が、今はもうメチャクチ
やでその性格を失つたた
めに自然それ等に対する
川柳もハッキリと出ない
と言ふことになつてゐる
やうに思ひます。昭和十

一年にルンペンの石坂一作と
言ふ人が一万円を蓄めてゐた
と言ふので全國の新聞は最大
ニュースとして書きたてるし
松竹はこれを映画にし會我家
五九郎はこれを一座に引き入
れようとしたり、我社でも一
万円句会と言ふのを開いて全
一頁をこれに費したりした事
を思ひ出します。我々サラリ
マンではとてもその当時の
一万円等にはおよそ縁が遠か
つたのでその時の先生の句に
一万円フンと云つて草に
寝る

（こゝで生々庵氏往診から
歸られて出席）
瓜平 一万円で人間の命はど
れ位救けられるものでせうね
生々 しいや仲々一万円なん
て儲けるには大抵じやないで
すよ。

路郎 今頃解つてくれたんで
は………
鮎美 しいやーそうぢやないん
です。そりやあ先生、その当
時からよく句意は解つてゐる
のですが、更に私の胸を打つ
ものがあつたのです。

豆秋 十年一昔と言ひま
すがその十年間の貨幣價
値の変動と言ふものは驚
くばかりで十年前前には
十円は十円、百円は百
円の、一万円は一万円の
各々性格をハッキリと持
つてゐたように思ひます
が、今はもうメチャクチ
やでその性格を失つたた
めに自然それ等に対する
川柳もハッキリと出ない
と言ふことになつてゐる
やうに思ひます。昭和十

一年にルンペンの石坂一作と
言ふ人が一万円を蓄めてゐた
と言ふので全國の新聞は最大
ニュースとして書きたてるし
松竹はこれを映画にし會我家
五九郎はこれを一座に引き入
れようとしたり、我社でも一
万円句会と言ふのを開いて全
一頁をこれに費したりした事
を思ひ出します。我々サラリ
マンではとてもその当時の
一万円等にはおよそ縁が遠か
つたのでその時の先生の句に
一万円フンと云つて草に
寝る

（こゝで生々庵氏往診から
歸られて出席）
瓜平 一万円で人間の命はど
れ位救けられるものでせうね
生々 しいや仲々一万円なん
て儲けるには大抵じやないで
すよ。

路郎 今頃解つてくれたんで
は………
鮎美 しいやーそうぢやないん
です。そりやあ先生、その当
時からよく句意は解つてゐる
のですが、更に私の胸を打つ
ものがあつたのです。

ある結果となつてゐるんだらうと思ふ。誰の句だつたか

「百円札残念ながら拜まされ」

や「差当り手許に遊ぶ五円札」

などの句を詠んだ時代を我々は懐しく思ひますな。

路郎君は拜まされは当百の句だ

豆秋君は拜まされてゐた百円札

も現在ではさつぱり落ちぶれてしまひましたなあ。

百円で何も買えぬとすねてる

子

と言ふのが、錦風さん、貴方の句にありましたな。

路郎君は削平の句に

百円の者は箸の先で喰べ

と言ふのもあるよ。それから

斜水に

百円のおもちやだ泣かずに

見ておくれ

と言ふのもある。

豆秋君は錦風さんは貴金属のことにお詳しい筈ですが今金は一匁どの位ですか？

錦風君は唯今政府から金の配給許可を受けて居るのは歯科医だけで月に約五百グラム（凡そ一匁強）その価格は大体千

二三百円と聞いて居ります。

私等業者はお手持の戦災をまぬがれた金製品を賣買致して居ります。先づ引取價格と致しましては一匁純金で二千

七、八百円位が相場だと存じ

ます。何分製品の種類により大差の差價が有りますが。

金貨とか金盃と云つた比較的金性のまじめな品は値段よく

鎖の様なロー付の多いものは二三割方格安になります。

生々庵君は総入歯にするの大したものですね。実はね此の間

家内が歯をすつかり抜いて総入歯にしたんですが、七ツに

なる子供が「お母ちゃん死んだら僕に頂戴ね」と片見分け

の予約をしてゐましたが、そうすると仲々賢いわけです

ね。（笑声）

豆秋君はモット変つた種類の句はないですか。

路郎君はもうだネ、亡くなつたかほる君の句に

ともえ焼き五十圓がにうろたへる

と云ふのがあるが、これは大正末期か昭和の初め頃の句だと思ふ。当時巴焼は一個一錢

だつたので五十個も買ふやうな人は無かつたのである。

かりに今だつたら

「ともえ焼き五百圓がにうろたへる」

位に云はんとその感じが出にくい。そうすると千倍位になる訳だが物價の変動がこんな

にも句の内容に影響するかと

思ふと面白いではないか。そ

れから大正十二年に五錢を詠んだ句で

筆筒から探ればバツト買える

ほど

と言ふ句が柳珍堂にあるがこれで見ると、今のきんしの前

身のバツトは当時は五錢だつたといふことが解る。それが

同じ銅貨で今の時代の句

瓜栗君はそれもインフレの前奏曲とでもいいませうか、未だ

一錢の役立つ頃、アルミ貨を粗末にはじめた句が随分あつ

たようですね。アルミ貨が風に吹かれたとか、袂裏と出て

きたとか言うのが……

點美君はあれは僕の句です。

アルミ貨が袂の裏と共に出る

と言ふので

す罰当りな

話です。

文雄君とこ

ろが同じアルミ貨でも

寒風へひび

かぬアルミ

貨の淋し

（窮河）

と言ふ句も

ありますよ

錦風君はまだ

変つたのが

ありません

か。

路郎君はもう

だね。

インフレの要五円の銅貨です

と言ふ句が春草君にあるのと

対比して面白く感じます。

豆秋君は鞍馬さんの句に

出れがつかまてぼつた五錢札

がありますか……

千円もしますのやと附を

され

（生々庵）

千弗の無心をされた時が花

これはハワイの一浪の句だ。

八万円の牛で田も鋤き酒も

飲み

（蒼天）

それから

名乗り出た百万円を讀んで

寝る

（一球）

輿論には勝てじ新生三十円

（方正）

肥車十万円の牛が揜き

（安方）

そんなところかな。

豆秋君は肥車を挽く十万円の牛

で思ふことは昔山内一豊の妻

が鏡箱から齋繰を出して東國

一の名馬を買つて信長にほめ

られ立身出世の糸口になつた

その名馬の値段が十兩でした

錦風君はこんな実話がありま

す。或る旧財閥の方が財産税

に困つて居られた処、奥さん

が嫁入りの際に持つて來られ

た当時二千五百円程度のダイ

ヤの指環をお賣りなつて三十

万円を用意され、主人の窮乏

を救はれましたがこれ等は今

様山内一豊の妻ですね。

瓜栗君は

朝風呂、朝酒で潰した身上は

何ぼくらのもんでしたでせ

うな。

文雄君はさうでんな、梅忠の封

印切りは五十兩ですね。

豆秋君は軽い身代金も五十兩

です。

路郎君はしかし普通は身代金は

五十兩もなかつたでせうな、

昔の百兩は大したもので、

百兩をほどけば人をしさら
せる

といふ句がある。つまり小判
が一枚でも紛失したら大変だ
といふところがあり／＼出て
ゐる。同じ百兩でも昔の醜い
娘を片付ける持参金としての
古句もある。

鶴風 今嫁さんの持参金の話
が出ましたが近頃の持参金は
まち／＼で標準がありません
路郎 昔は借金の切り抜け策
に持参金百兩也の嫁を貰つて
年の瀬を越し春になつてそれを
離縁したと言ふ哀話もある。
文蝶 今やつたらそれこそ、
貞操蹂躪、損害賠償といふの
で訴へられますね。

路郎 結婚詐欺と紙一ト重の
差なんだらうね。

鮎美 私の勤務してゐる会社
では結婚資金は一人八千円で
すから社内結婚の場合は合計
一万六千円貰えるわけです。
それを今一人一万六千円を要
求してゐます。それも先達て
のストの一條件でした。昔は
社内結婚は、男女何れかが、
大抵は女の方が退めさへれた
ものですが、今は仕合せなも
んですね。
生々庵 大学病院は医員と看
護婦が一緒になつた場合は両
方とも居られなくなつたも
んだ。

文蝶 ところがかさうばつかり
でもありません。今から二十
年前、僕の妹が通信局の料金
課に務めて居ましたが、そこ
の課員と結婚をしたときに料
金課長が参会して土佐堀のキ
リスト教会で式を挙げまし
た。前の話と対照して通信局
は進歩していったんですね。

所謂不義はお家の御法度と云
ふやつですが、城主の諒解を
得ればいゝんです。

瓜平 何だか恋愛座談会みた
いになりましたね。色と金と
二股かけるとは慾が深いです
な。



大阪そごう

そごう卸商品館
十合商事株式會社
國土士佐場一丁目
そごう灘波店
地下鐵ナンバ駅上階

そごう梅田食品市場
大阪 東區
そごうアベノ店
上町 東區
そごう更生デポ
大阪 東區

路郎 それは恐らく例外でせ
う。と言ふのは君の妹さんが
非常に優秀な人で例へば珠算
が非常に達者だとか何んかで
今退められると困るから事秘
便にと云ふ事になつたのでは
ないかな。
鮎美 私の社でも必ずしも誠
にしたわけではないわす。

路郎 やつぱり金銭の問題に
戻りませう。インフレになつ
ても収入の方にその比例で響
かないので苦しんでゐるのも
あります。例へば謝礼生活で
すな。私の親戚から、お寺では
近頃和尚さんが無闇に金のこ
とを言はれる昔はあんな人で
はなかつたが」といふことを
聞かされたがお布施が檀家の
お心持次第ではどうしても今
のインフレ状態の貨幣價值に
相應しいだけのものは提供さ
れないといふところから止む
を得ず悲鳴をあげていふのだ
らうと思ふ。放送なんかの謝
礼でも昔からみればうんと上
つてゐるが、NHKを日本薄
謝協会の略字と読むほど特殊
な人には薄謝と感ぜられてゐ
るのからみても謝礼生活の苦
しさが解るであらう。医者や
漫画家や弁護士などの謝礼も
同感の手を挙げられるに違ひ
ない。
生々庵 医者の謝礼で面白い
話があるんです。出産に産婦
人科の医者が招かれ駆け付け

主催 川柳雜誌社 後援 朝日新聞社

ステート・フェア

全國川柳大會

☆日時 五月八日(日) 午前十時入場
(雨天順延小雨決行)

☆會場 近鉄沿線 あやめ池遊園地
日本ステート・フェア大展覽場内 野外劇場

挨拶 司會者 西 尾 榮
挨拶 大会委員長 中島生々庵
挨拶 朝日新聞社 企画部長 鶴 秀 茂氏

講演 新日本のユーモア味と川柳
川柳雜誌社主幹 麻生路郎先生

兼題 「青春」 二句 近畿代表 麻生路郎 選

「改良」 二句 關東代表 大谷花五村 選

「紙幣」 二句 中部代表 伊志田孝三郎 選

「温泉」 二句 山陽代表 浜田久米雄 選

「風水」 二句 山陰代表 尼 綠之助 選

「山水」 二句 東海代表 榎田竹林 選

「椅子」 二句 北國代表 森下冬青 選

日本の新聞・朝日新聞が創刊七十
周年記念事業のヒットとして、アメ
リカの年中行事ステート・フェア
「日本の共進会」を本格的に再現する
「日本ステート・フェア大展覽」を
近鉄沿線あやめ池遊園地十五万坪に
繰り広げることになった。この時に際
して、これが諸施設中の野外劇場に於
て我が社主催・朝日新聞社後援の
「日本ステート・フェア全國川柳大
會」を開催し、新しい川柳が民主
日本の根柢であることの實証を示す
ため川柳會場附近の櫻樹に柳句五百
有余の短冊をつるし、講演に、作句
に、名句はマイクや漫画を通じて弘
く大衆へ呼びかけることになった。
全國川柳人の賛同と來援を切望して
やまない。

たところがお産が軽くて既に生まれてゐた。ところが臍の緒がついたまゝだったので処置をして帰つた。翌日その請求書を取りに來たが謝礼を半額にまけるといふのださうだ。もう少し早く行けば医者が行つてから生まれた事になるのだし、こんな場合はどうすればいいか考へたと云ふ話です。それから中耳炎は両方の耳だと健康保険なんか二点になるのですが眼科は両方の眼でも一点で処置料は倍額にならない。

文蝶「鼻の穴も二つあるがこれほもつと近いね。(笑聲)生々庵「昔は耳鼻科へ行くと耳も鼻も咽喉もみんな診たものですが、今は耳を診たついでに鼻を診やうと思つて「いや鼻は大丈夫です」と断る。(笑聲)別にそんな心算ではなしにサービスに両方の耳を診やうとしても「いや、左の方は何ともありません」と断るんださうです。僕はそんな事は知らなかつたのですが医者より患者の方がよく知つてゐますね。それ丈せち辛くなつたんだね。

路郎「いや話のはづんで分大 おそくなつたやうですから今日はこれで……お忙しい処を有難う。(梨里筆記)」

アメリカ式 驅虫薬
★十二指驅虫★
★煙 虫★
テトレン 球
黒田製薬株式会社 東京 大塚



町 石倉根民郎選

飲んでゐる機嫌が町の灯をほめる
青年部町の革新リードする
靴磨きする少年が強い町
町の朝リユックは空のまゝ通り
町へ来た先生直情的になり
この町のレヘルへ踊る石井漢
横顔も眞顔も町の金すまり
税金をかりたてんとす暮れの町
乗物もなく落付いた町の幅

雀雄 武雄 葉光 芳醇 鮎美 日瀨子 没食子 同 山雨樓 同

課題吟

恋人をさらつて行つた町のひと
青春の決意へ町は小さすぎ 七面山 同

(選評)

全般的に應募作品の低調であつたことは一
殊のさびしさを感じさせた。概して「町」を
凝視する鋭い感覚と批判が見られず、安易な
組立てに十七音律をもてあそばんとする常識
主義がほのめいてゐた。現代川柳の求めるも
のは、意慾ある文化性に根ざす生々しい息吹
きを覺える作品でなければならぬのである。
「生命ある句を作れ」とは路郎先生の喝破し
た箴言ではないか。

同 同 同
「特種」二句 四國代表 前田 伍健選
「通訳」二句 九州代表 速水眞珠洞選
「月給」二句 北海道代表 宮田 不二選
(不同敬稱略)

締切 四月二十三日着(大会事務所)

席題 十題 (題及び選者は当日発表)

兼題は四月廿三日以後は受付出来ませんから
特に御注意下さい

席上揮毫 漫画 種 瓜 平画伯

會費 五〇円 ★投句のみの方は兼題と共に小爲替三〇円
又は五円切手六枚を同封のこと。
別にステート・フェア入場券(七〇円)
は御入場の際各自お求め下さい。

賞品 朝日記念賞 (兼題及場内雜編天位に贈呈)
川柳雜誌社賞 (兼題席題及び場内雜編天位に贈呈)

記念撮影 (希望者には実を申受く)

大会委員 生々庵(委員長) 里十九(総務) 香林(総務)
普天・綠雨・亞鈍・久米雄・鮎美・豆秋・方正・
古方・水客・紫香・潮花・琴水・竹莊・翠光・
白柳子・小松園・綠之助・水車・民郎・三笑・
風來子・雅美・文蝶・瓜平・吞水・錦彦・正則・
鳩花・わたる・淡舟・星登・靜一路・竹青・貴山・
春柳・圭井堂・斗士・ト占・抱逸・宵明・錦風・
夢裡・没食子・愛論

有志懇談會 (會費約三五〇円)

大会終了後、川柳家有志懇談會を催します

大阪市南区三休橋南詰(中島医院内)

通信と投句は ステート 全國川柳大會事務所

注意 ●出席者は参加章御持参の事、但遠方の方は当日受付
にてお渡しいたします

○当日大会の受付はステート・フェア正門入口内に設け
ます

●辨當、鉛筆御持参のこと

○お宿は四月末日までに御申込下されば御紹介いたし
ます



大阪府 武部 香林

米対日援助

金貸してやろうへ信用少な過ぎ

二十四年総選挙

盃をかむ計りなり社会党

張込みへ訪するものは水雨なり

百貨店プラ／＼歩くところによし

当選はもう利権屋と立話

どろちやんの後から月がついて行き

兵庫縣 戸倉 普天

生活が此老人を働かせ

義兄にも金を出させて立候補

奈良縣 上田 翠光

そばに居るだけで嬉しい人と居る

信すると云ふ事の憂やかさを知りぬ

お父ちやんと云はれビクツとする心

じつとみつめれば牛の涙涙ぐみ

叩かれて牛は道草喰ひそびれ

横濱市 福田 山雨楼

五十二の春著述家を夢に見る

立春にしめしめ肺が固つた

婆藝者かいな市丸勝太郎

にわどりの前で新聞読みつくし

妻の父を悼む(二句)

八十二米一俵のおどむらひ

法華経の煙の中で八十二

布哇 高沢 一浪

捨てられた事あり捨てた事もあり

三味線や傘を枕の古日記

恋しくば御電話なさい逢てやる

生きてゐてくれる父上かざりなり

草の芽は俺が俺がと云ふ如し

女給とてその氣になれば燃ゆる恋

年寄の眼にも矢つ張十八九

池田市 戸田 古方

委員会茶菓子はどうになくなつて

いゝ年をして汽車の夢船の夢

罰金とかげば止めるかと思ひ

貧相のかつぐカフェのプラカード

布哇 内藤 草一郎

ユニオンで上げりや仕事に又あふれ

乳バンドあれもやつぱり人の兒か

乳バンドフットライトを蹴つて立ち

ハイヒール組んでルージュの冷やかさ

逢引きの口実はもう種が切れ

パークウエー恋知り初めた歩き様

タイピストカメラを向けりや斜にかまへ

尼崎市 水谷 鮎美

書初めへ先祖は平家の落人だ

寝正月昔のまゝの心が出

酒をのむ狸ころんだまゝの春

つゞくりの機へ天の句を書きぬ

春の高い方がついてく春の街

里十九氏二人目の孫出生

奈良縣 西垣 錦風

うれしさはサハリをちよつと語らうか

税金のかゝる甲斐性を羨まれ

参考の爲に見て置く桐簾簾

正札のてんのありかに恥をかき

子はカメラ親は値札に目が止り

卵生まぬ鶏に絞首の日が決まり

入院の義母手術

出血の多量へ齡を案じられ

大阪府 川村 好郎

宝くじズタ／＼に裂く大晦日

あゝ俺もいやなお客のうちだつた

袖の下断つて帰るいゝ月夜

贈賄へ心乱るゝ子の寝顔

球場も暮れて新聞舞ふばかり

子供だけ釣つた魚と信じ切り

岡山縣 浜田 久米雄

女房の声がかがった金づまり

眞剣な顔で差押えも帰る

焼酎の酔いとは見えぬ妻揚子

麦ふみの眼にちらはらと梅が咲き

大阪府 西尾 葉

養子ですと言ひおくれて話合せてる

牡蠣船やネオンサインは水にあり

茶碗一つ置いて清水店となり

トランプの散つたベッドへ檢視来る

靴磨きオヤ／＼指環はめてゐる

相聞歌未亡人には解りすぎ

布施市 永田 里十九

久し振子を抱いている女事務

いややろうけれどと女將口説かけ

大阪市 市場 浚食子

働きに出る靴で踏む朝の雪

四十九の春を迎へて一技官

金づまり委託でならと言ふ返事

名門出金に果敢なくぬかすきぬ



名古屋 吉田水車

大阪もくにも僕を呼ぶような
滋賀縣 北川 春巢

本阪市 橋本美奈子

十間札ちぎれくゝて年の春
バラックヘサントクロースちどあはて
ボチ袋昔のやつで間に合はず
おらが春閑せず焉と牛の尻
戦術のどこの詰りはバツタかネ
初相場のぞく姐御のふどころ手
トラツクの上から同情せよと言う

大阪市 須崎 豆秋

夢を見よすばらしい夢を 無税だよ
髭落とすのを忘れてる人多く
どろぼうと思ふて汽車の連れになり

大阪市 正本 水客

長男が恐い身分の樂隠居
間借の夫婦花をつくつてみたい衝動
だますなどつゆ思わずに金を借り
夫婦して娘の恋にうろたえる
そもくは連れ子であつた美しくさ

大阪市 黒川 紫香

子の愛に生きる苦勞は嘆となり
母親が違ひつくるものがあり
子に氣兼ねして後添と出る日なり
焼跡の廣き電柱の影長し
停電へ父のライター借りに来る
役人と言ふ隣りは靜かなり

神戸市 竹内 潮花

たたづめば月に淡路の見へる町
眞白に咲いて淋しい梅の花
人の子を抱けば淋みし身に迫る

大阪を去る日 (三句)

誰もみな私の袂ひく思ひ
ふるさとの土で死ぬ氣の荷をまどめ

終戦の前年だつたと記憶をたどる
女学生三人寄れば不良めき
病人の人生観にはげまされ
病床にいて小説の恋を恋い
日曜を間違えもせず朝寝する
私鉄ストその間に梅は咲いて散り

奈良縣 尾崎 方正

塗つて塗つて塗りまくつてまだ塗る氣
液落へパイプの艶の美しさ

姫路市 夷 一笑

へそくりがばれて去年の嘘がばれ
賣り喰ひの春は近きにあるものを
去年着た晴着はすでになかりけり
面白くないことを言ふ恋仇

大牟田市 高田 抱逸

賞與など夢みぬ駅の靴磨き
屠蘇の香に腰うばわれてダンスする
天井は張れず俺だけ屠蘇氣嫌
散票を拾ひにメガホン雇われる

大阪市 木下 幽王

十二月隣のほこりが舞込んだ
ガラガラも大人が振つたやましまし
三十女の恋はめざまじ白晝夢
いつべんいふたろと思ふこと多く
懊惱を極めつくせば棺がまつ

盛花あわれ向きたくない方向かされて

鳥取市 中島 鉄洲

白足袋で元且らしく過したり
水漬が垂れて虚勢の崩れたり
自轉車に乗つても歳は偽れず

靈柩車トレイバスをぬいて行き
同じ牛年嫁と姑の仲がよい
新学期入学する子がほしくなり
女子大出五人の子供にあくせくし
いつ洗うのかアパート物を干し
ゆづられた席に夫を掛けさせる
妾宅で書く隨筆と知らずして
自尊心淋しい嘘をつきました

兄弟が頼り合つて五十過ぎ
ダンサーと灯の届かないところで逢ひ
給料を拂ふ身分が苦勞する
手を握るだけで初恋はかどらず
松の内母も見て居る紙芝居
かうなつたまでをはゝるむ置炬燵
平凡に鍵と暮らして監視老け

大阪市 水谷 竹莊

麻雀をおぼえて嘘が続くなり
顔役へ巡查愛嬌言ふて行き
玄關へ立てば屏風の虎が吠

見送りがかゝから帰る街はづれ
役得も知らず公僕老けて見え
宝鏡妻は産後の床に臥し
どつちでも良い配給を籤にする
紙蒿の糸解く間が待てぬ子の火鉢

鐘一つアコードオンも疲れ氣味
旅立ちの朝へ花道雪となり
ダンサーは嘘を上手に聞いてゐる
男一匹無力で事務の隅に居る

兵庫縣 小沢 史葉

下関市 國弘 半休

廣島縣 弘津 柳慶



税金を稼ぐ間とは淋しいね

神戸市 大鶴喜由

妻が羨んだ人独房に居

キヤパレーの門で儲ける靴磨き

長の身の急所の外はほめてをき

最少の酒で酔ふ術の阿呆踊

この策に合はす格言見つけ出し

袋浴衣山陽が筆投げたところ

二人で入れれば陽氣もまぶしくて

大阪市 吉田斜水

誘つたら女アツサリ承諾し

お神酒もう下げて女房に叱られる

女房の年賀照臭さうに受け

計算が済み賑かな娘に還り

布施市 糸本酔月

党名に恥ぬ亡者がうよくし

飼猫の野獣のすがた屋根に見る

中道の政事に飽きて右左

心にも無く共産党へ票を入れ

憲法が変り人情の薄くなり

奈良縣 白牛奇郎

賣り食ひへ御氣の毒だと安く買ひ

証明より少しは多く米を入れ

指も曲らぬ皮手袋は胸にさし

ガム食つてゐる口紅のあさましい

岡山縣 山分北路

十二月木の葉も人も裸なり

同権へ言ひたい事を言はず置き

キツスする処まで映画二度見て出

下松市 山根白星

ガード下でんやわんやの人通り

縊死したと見えぬ笑顔で居る写真

甘い世と思ふクライスラーの窓

工場街下松

灰の降る街です僕の空がない

工場街指のないのど飲む屋台

ストストと騒ぐ男に指がある

瀬戸市 鈴木みきを

日記帳どの子も同じ親思ひ

誕生日まで配給酒しまはれる

クリームがどうのこうのと娘等の春

奈良縣 西辻竹青

脱税の儲けるよりも骨を折り

先進は兎角あだ名で批判され

自由思想はなれんの村となり

借金へ言訳にする暮の雪

吹田市 野本呑水

押入れにゆとりが出来た腑甲斐なき

健康な妻に感謝を忘れてた

祭日の國旗に團結あやぶまれ

資本家を守る税革とも知らず

吳市 林野甍光

反省はするが話題を変へませう

君兎に角用件を言ひ給へ

手に執つて見れば相場は相場だけ

走つたのは闇屋すべつたのはボリス

能書は俺の病氣にみな当り

名古屋 山林正思

職を得て歳暮の街も歩いて見

立候補保釋の人とおもはれず

京都府 間島青丹子

山の町リンゴの町にして暮れる

えぞ松の雪の深さを汽車ぬける

入墨の過去も淋しい父であり

馬鹿にした金に頭を下げさゝれ

大阪市 上田春柳

病上り煙草の味もほめて見る

税金の話で皆だまりこみ

男だと里へ知らせる頼信紙

山口縣 長野井蛙

戦斗帽鼠の家に見付けたら

留守番も置いて選挙の家を持ち

茶を喫ます筈の店から千鳥足

○

金沢市 安川久留美

昔植えた柳は残り梅は朽ち

これからは父のふるさとバスが有り

誕生やしきちがいと成り旅え出る

井も朱塗り女は上品な

松山 前田伍健

よい雨としておこ木の目空を指す

物言はずそれで事すむ老夫婦

玩具屋は親子へ言葉使いわけ

君だけの自由でないがもめるもど

愛媛縣 蛭子省二

オガムクラシ

「日々切腹」神祇釋教恋無常

モネー描く霧がおいしい霧の里

御宅食生活

老子讀む旧正月の乞食省二

大阪市 橋本緑雨

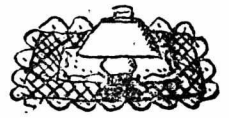
金沢へ帰省

かぶらずし田舎の味も久しぶり

松の葉が落ちて砂道なつかしみ

西本三笑氏を訪ふ

柳友の儲け話ににぎりすし



窓

同 號 問 題

麻 生 路 郎

だいぶ以前の事である。交通局の句会で披露の時に、「みのろ」が二人ゐたので披露が手間どつた。そこで私は同じ雅号を持つ作家が二人も三人も出来た時にはどうしたらいいかと云うことに就て談じた。その結果、不朽洞会員のみのる君が私と相談して「星登」と改号した。「みのろ」の場合のやうに、句会で同席してあきらかに、お互ひに一寸困つた場合にはその解決は案外簡単であるが、遠隔の地にある作家の場合にはそれは出来ない。同じ雅号があらはれても、一回の文信もないのに君の雅号を何んとか変更して欲しいと云ひ出せない。一昨年だつたか或る作家から、私の雅号と同じ作家が各地全報に出て来たから、私の句とまぎらひしいから何んとか談じてもらへぬかと相談があつたがこちらも新しいあらはれた作家とは新しいおつき合ひでもあり、そのうち機会を見て談して見やうと返事をして、遂にそのままになつてゐたが間もなくその作家の句が「川柳雑誌」から消えたので自然に解決がついたやうなものであるが、それも「川柳雑誌」で顔を合はさぬと云うだけで、いろいろ問題が考へられぬこともない。例へば後人が、その人の句集を

編む場合、新しい作家の句が混入せぬとも限らないからである。姓が違ふとか、府縣別で区別が出来るとか、發表誌によつて、判るとか云うのは大まかな云ひ方であつて的確であり得ない。短冊などでは姓を書かないし、会報では姓までつけないからその点、姓が違つて居てもどうにもならない。府縣別の肩書にしても、同府縣である場合もあるし、あちこちと宿替をすることもあるので、これとても確証にはならない。發表誌にいたつては殊に同じ柳誌に同号の作家があらはれることは稀ではないので、他の人たちがそれを明らかに識別することは困難である。そうすると、同じ雅号を持つ作家があることを知つた場合には、逸早くどちらかの作家が改号をするより策はないと云へよう。誰でも一度使用した雅号には愛情があるので改号はしたくないものであるが、自分も迷惑を感じ、人も取扱に困まる場合を考へたなら、なるべく早く改号するに限ると思ふ。

そんな雅号をつけやうと、その人の自由には違ひないが、今更、漱石だ、子規だのとつけるのは、避けるのが穏當であらう。それは先人に対する礼でもあるし、少々いゝ句を作つても、先人の名に庄倒されてしまふおそれがないとは云へない。これと同じ理由で、川柳家の先輩と同じ号であることを知つた時には、直ちに改号をした方が穏當であらうと思ふ。しかしながら、改号をした号が、又同じ号の人があることを知つて、困まる場合もあらうと思はれるので、改号に就ては全國的に雑誌を見てゐる先輩が、雑誌社などへ相談されるのがぶんであらうと思ふ。

不朽洞會から

それから、矢張り、その雅号に幾分の未練があるし、柳友に呼び慣らされてゐるのをムザ／＼棄てゝ、親しみがなくなることを憂うる人は同音の文字に換えるのも一策であるが、同音の欠点は句會での披露に、一々、酔う月ですか、水の月ですかと問ひ返へす必要のあることである。しかしこれは辛棒して出来ないことではない。全國の柳誌を見てゐると、随分同じ雅号の人がゐる。多いのになると五人位ゐる。二人や三人の同号は稀ではない。これは同号を持つ人だけの問題ではないと考へるの

●それほゞ東京に居る方が長く自分でもどちらが家でどちらが出張先かわからなくなつてゐますとのこと●大西八歩氏(鳥取市)も出張多忙の一人で「出張」の選句も汽車の中でされた●池沢樂居氏は奈良市高知東大路二〇五へ移られた●田村孝之介氏は元の住所神戸市灘区高羽常盤木三七へ再建された●徳永雅美氏は大阪市東区岡山町三五八へ移轉●前田五健氏は旧居松山市真砂町二一へ帰へられたので「城山へ帰りましたと新居窓」の句信を寄せられた●戸倉普天氏(兵庫縣)は一年間に三百五十把の柴と百駄の割木を消耗するので晩秋から春へかけては山稼ぎで多忙々々の日を送つてゐられるとのこと●夷一笑氏(姫路)は白鷺会は四月三日に赤穂へ吟行するとのこと●須崎豆秋氏は發行されたが引續いて「川柳四季補輯」を出された●路郎師は三月三日の日本輿論新聞に「大衆の剣を見よ」を、三月十五日の大阪日日新聞へ「幕外」を執筆好評を博された●淡田久米雄氏は岡山縣川柳人交歓のために、川柳句集「吉備園子」を刊行されるのこと、岡山縣下の川柳人は岡山縣和氣郡吉永町の同氏と連絡して詳細を知つていただきたい●菊沢小松園氏(大阪)は痔疾の手術で、三月廿七日に阿倍野橋の辻肛門病院で手術、手術後の経過は良好とのこと。

▲永田里十九氏は三月

切れない
電氣をくわぬ

松下電器産業株式会社

高純化材料容器には最適!

サマシンの……

黒硝子

大阪富田製硝子
西堀一丁目四番
山 銀 株 式 會 社
電話 堀川四四七番

中旬から神経痛で病臥されてゐる

新會員紹介

三月
友淵貴山氏(大阪) 正
森下愛論氏(大阪市) 正
四月
没食子 紹介
大西柳堂氏(大阪市) 正
鮎美氏紹介



盃洗に酒を流した頃もあり尼崎市聴松
今死ぬとしたら未練は酒ばかり 同

選挙雑感(二句)

收賄はせぬかと尋ねられもせず 同
演説のひまで麥でも踏み給へ 同

新春雑詠

新玉の春から鶏も産んでくれ 同
年賀狀保釋中とは書てなし 同
トランプで占つてたが何処か行き 同
マラソンの練習鼠息怠らず和歌山宏方 同

子に意見するは見えずチンドン屋 同
日歩の味知つて銀行馬鹿らしく 同
役得の薬も飲まぬ健かさ 同
ほれた子の涙の顔も美しく 同
病院の灯れば廊下廣すぎる 同
お二階のダンスの稽古持て余し 同
死んだ兒の名前を口にしない父 岡山縣七面山 同
薄情な世間え首でも吊つたるか 同
兒を抱いて此の幸福よ続けかし 同
窓口の花と呼ばれて年を取り 同
身と心腹の子供も捧げまゝ 同
泣き方が上手と夫褒めた丈 同
女ですの云つてる様な腰の線 同
美しいドレスけがれた身をつゝみ 大阪市草々 同
女三十肉体蛇に似て恐わし 同

情熱の一夜山小屋吹雪する 同
うれしさよ茶房の植木鉢の影 同
急停車あわやキッスの一步前 同
宝塚今は忘れて子を負ふて 同
焼跡に人形が焦げていてあわれ 同
風呂敷の中も風呂敷里帰り愛知縣吐平 同
始末書の雛型見せて書かせる氣 同
先生になぐる自由が慾しそうな 同
出るとこへ出て言ふだけさ滞納者 同
魚屋が引受けた手の早いこと 同
好き嫌ひ子供はすべて具体的 同

妻病む

このまゝで死ぬかと泣いてみたりと鳥取市日満子 同
死の話なぞして女房病みつゞけ 同
母親が医者若さを不安がり 同
正月を過す用意の本も借り 同
貸すもんやおまへん二階塗りなを 同
働いてくれまます吝な養子です 同
妾見にはすむ心の紅をひき布施市愛論 同
恋をした頃と違つた妻の指 同
亡き父の指丈が合ふ育ち様 同
税金が私の家を支配した 同
囲われた旦那の齡が氣に入らぬ 同
酌ぎ方も覚えおだてる事も知り 大阪市良子 同
もろてから大酒飲みと解るなり 同
いゝ加減酔ふた処へ切り出され 同
小説の様な事やと受付けず 同
二人共医者儲けてる様に見え 同
茶葉服あれが社長で御座ります 小松市茶佛 同
美男美女家を探すに当てどなく 同
それみろと言わぬばかりのあはれ 同

コトリとせぬ母がゐて有難し 同
北陸として経験のない暖冬 同

ゴム長の苦面を悔いる暖かさ 同
間違つて引かれた袖と氣がつかず兵庫縣齊花 同
傘持つて來たので嘘がばれちまい 同
おもむろに夜の女は部署につき 同
ジープいつか日本の道になれてた 同
橋立を宿の手摺で見直しぬ 同
せんすべもなく淋しさのまゝある 今治市一風 同
ふと想ふ恋ともならず別れしを 同
酔ひはてて皆善人の中にねる 同
こちら向き笑へり涙ふきもせで 同
お氣輕にソフト出て來る二重橋横濱市万年 同
声ばかり風にとられるアルバイト 同
汽車賃を浮かす心算の米を提げ 同
リュックサック母が脊負へば世帯染 同
建設へ牛もゆつくり寝て居れず 大阪市葉光 同

御題「雪の朝」

雪の朝働く人の跡早く 同
遠い空をながめて淋しがらみ頑張る 同
想像の遙かにしつかりして泣かず 同
衣食住足つて個人を主張する 大阪府きさはち 同
結婚をしてから夢もせちがらく 同
大臣の名前覚える閑もなし 同
てんやわんや大阪駅の砂ぼこり 同
軒を打つ干菜暮しのあからさま 宇都市粗影 同
性愛は尊からずや花粉散る夕 同
餅焼くに故郷の雪を懐しみ 同
仲のよい紅雀外出すきな未亡人 同
手を組んで歩いてみたい年だもの 香川縣迷観子 同
箸持てば三、七〇〇圓喰てしまひ 同

新編 浮城物語

裾模様あの日あの時それつきり 同
証明書めぐりめぐりて印一つ 同
旧恩に報いて胸を撫で下し高槻市丁路 同
金の爲なら死をもいふ程に呆け 同
貞操も賣らねば食へぬ世を呪ひ 同
仕方なく次善へ札を入れてくる 今治市松花
理窟だけ身に錆びて嫁きおくれ 同
演説は居眠りをした顔でなし 同
踏切にはくけた顔が十あまり 今治市俗人
たゞ恋し旅の旅館に灯ともれば 同
登り来て目路のかぎりの河光る 同
恙なう死ぬには葬儀費未だ足らず 岡山縣鬼灯
出勤の寸暇え妻は子を抱かせ 同
靴だけ一万圓のを提げてゐる 同
給料はともかく働かねば寒く 愛媛縣旭童
麦デリリ／＼と冬を戦へり 同
小さな娘に似て南天の寒の赤き 同
吹けば飛ぶ様な女他を云わず 大へ縣表情
カストリでよいと衆議が一決し 同
吾老ひぬ子故の詐欺に二度も遇ひ 同
流行をさげすむ様に労働者大牟田風浪
縁談をでは是ではと持つてくる 同
好かぬ縁厄年ですと断つた 同
バスを待つ花嫁鶴の如く立ち 佐賀縣えい
ハーモニカ吹いてハリスト今日は暮れ 同

某遺跡を訪れて
御座所遠く白い埃を伏し拜み 同
鬼検事靴の中はエロ雑誌 滋郎
靴磨きの前を通れぬ靴をはき 同
嫁入の豪華は闇を疑はれ 同
これが男の体臭と知る糸切齒兵庫縣天平
こぼれ米妻は一粒一粒拾ふ 同

路傍に詩あり籤賣り靴磨き 同
候補者へ貴方でないと言えもせず 鳥取市穂波子
親世音甘えてみたい御姿 同
御詠歌のどこか俗曲めいてくる 同
どぶろくも賞めてなかくいふ医師 石川縣義久
あきらめて百姓がまた百姓する 同
ターミナル籤に新聞靴磨き 兵庫縣正司
諸洗ふ湯なれどこれが慰安なり 同
立ち並ぶ裸木似合ふ朝のビル 東京都武雄
働ける若さが惜しいガード下 同
不治ならばすつとお側で看護 貝塚市一郎
向ふ三軒愛人と聞くほの／＼さ 同
銀のふすまに旧弊の極 愛媛縣曉童
爪にともす火それがかんばん 同
試験だよ檣橋落ちて氣概吐く 大牟田啞午
西尾落ち片山が落ち世も遷り 同
口喧嘩しつゝ恋愛進行し 岡山縣赤崎鈴
抱きしめて呉れとは娘言ひ切れず 同
此の雪を始発へ送る母があり 愛媛縣曉明
急用が遂に叩いた二號邸 同
青春の書棚が寂し技術屋の 今治市逸
白衣着た人コスモスを活けてくれ 同
賣店のマダムへ小さい恋のあり 兵庫縣哲水
半処女へ軽口たゝいた聴診器 同
墓地に来て墓地の廣さを淋しがり 丸亀市浪二
炭ついでゆつくり愚痴を聞いて 同
我さん拜んで買った宝くじ 大阪市晴夫
大晦日当直
自炊から二十四年の春が明け 同
鬼瓦のあだ名にも似ず親しまれ 新居湊明窓
裏切つた相手も今は不倖せ 同

俄雨バンバン図書館に入りたり 尼崎市愚黙
恣すればノックの音も聞分ける 同
親しさに自轉車四五町歩かされ 鳥取市夕路
超過米供出よりは税でもめ 同
あるだけの着物着て出る冬が来た 山口縣不句郎
誕生日だけ銀飯の案通り 同
シーズンだ俺も写真を撮つところ 日田市独活
ピンポンに女は笑ふているばかり 同
インフレに勝てず福笹五百圓 大阪市野草
鼻声をとがめて一本つけてやり 同
逢ふまでを軽いリズムに乗つた靴 石川縣夏波
はんもんをかき消す様にバスが行き 愛媛縣柳史
今年こそはと日記帳だけは作つた 大阪市葉栄子
伴奏のついてゆけないのど自慢 同
いゝ加減遊んで用事思ひ出し 同
迎春に老婆の足袋ツギがあり 同
夏みかん男やもめが買つて行き 大阪府白湊子
お連夜のお布施は施主が値上する 池田市木声
ハイヒール雪へ遠慮の歩を運び 岡山縣不死鳥
ハーモニカ誰か夢なき丘の上 同
落ぶれた生活の中の祖母の咳 高知市元馬
一號も出て来て花見朗かさ 熊本縣砂川
灰皿へさても高價な待ぼうけ 熊本市室久
しんみりと語れば俺も淋しいの 愛媛縣川波

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に……
ホルモザン錠
45錠入
大阪・武田薬品工業株式会社



柳樽と

柳亭種彦

富士野鞍馬

妙句では「木卯」（モクボウ）と號した。

四世川柳が敬慕してゐた人に、文日堂礫川翁があり、又社会的に知れ渡つてゐた「修纂田舎源氏」の作者柳亭種彦があつた。一方「柳樽」の版元花屋久次郎星運堂菅籬は、文政二年の七十一編を最後として二代目となり、三世川柳の失脚から二代目星運堂菅子は、その柳樽刊行を續けてゆくの、相当苦心をこらしたらしく、七十二編以後は後の四世川柳である眠亭賤丸の時代で当時羽振のよい作者柳亭種彦を前句界柳樽へ引入れたことは先代が十返舎一九を使つたよりも成功であつた種彦は天明三年の生、小普請組の旗下で、二百俵の祿、本名を高屋彦四郎といひ、知久と名乗り、至極穩やかな人物であつた。幼い時カンシヤク持であつたのを、父が「風にあたまはられて睡る柳かな」の一句を與へて戒めたので、深くこれを体得して「柳亭と號し、又彦四郎から「種彦」とし、狂歌では「柳風成」

妙句では「木卯」（モクボウ）と號した。住居は下谷であつたが、天保六年に浅草へ移り、「修纂」十九編の序文に「乙未の秋下谷より浅草金龍山の門並森の下道の南丁字街へ移る」と又同二十編に「此おうまやがしの渡し場を左へとつて馬場をよこぎりさつそく相知れます」と場所も明示してある。仲々綿密な性質でいろいろの考証にも心を用ゐる「用捨箱」「すきかへし」等の考証書の著もあり、文化四年に二十五歳で初めて讀本に筆をとり、有名な「修纂田舎源氏」は文政十二年四十七歳の時から天保十三年まで三十八編を出版して、三十九編を校了し四十編に着手の時に、水野越前守の改革に遭ひ、この年の夏奉行の召喚を受け、板元鶴屋は板木召上げ、種彦は謹慎といふことになり、その爲非常に悩みを重ね、間もなく再度の召喚の時七月十九日に終命した。一説には自殺とも云はれてゐる。時に六十歳で

散るものと定まる秋の柳かな
我も秋六十帳の名残かな
の辞世があり、赤坂一ツ木淨土寺に「芳寛院勇善心禪居士」となつてゐる。

性來穩やかな人であつたから「修纂」出版についても、画工國貞とはよく提携して、國貞もこれによつて「源氏繪」といふものをひろめた。草双紙を書いたのは文化八年頃からで、数多の名著があり、「修纂」に「源氏物語」の和歌を發句に替へてゐる等の趣向は種彦の一面を察することが出來、洒落本にも「山あらし」の一冊があり、狂句は「修纂」執筆より前、文政四年頃から柳樽に見える。そして「戲言句会」（天保六）「古今二葉柳」（天保九）の狂句書の著もある。

僅の成田不動奉願大会にあたり、葛飾北齋もこの会を最後として消えてゐるし、柳樽の版元で健吟振を見せてゐた菅子もこの会を最後として、この会の發表誌である百二十二編から柳樽の版元もやめて、市ヶ谷御門外の奎文閣河内屋石井佐太郎に譲られてゐる等の事情から考へて、何か大きな経緯問題があつて、狂句界と柳樽に大きな異変のあつたことが想像出來る。その頃から鯉齋、仙の名声が日に日に加り、遂に川柳五世を継ぐようになったのである。

種彦は版元星運堂菅子の求めに應じ、幾度も柳樽に序文を書いてゐるが、さすが時の大作者として垢ぬけのした名文を見せてゐる。

七十七編序

（文政六年、四十一歳）

川柳の俳風たるや、明和安永の頃より、碑門谷の二王とひとしく行れ、中州と共に盛んにて、よくいふ紋の上下と、人をして感じさせ恐れ入谷の鬼子母神と、口を閉めたる者もありとか。さて中頃は少し洒落をあらためて、見たようだのはめ句をいはず、よろしく申しつくりの鐘、屋根で鳥の穴を穿つは、よかいの仕事と笑はば笑へ一ち句大尾をしまの鬼、此頃はやりの染手ぬぐひ末番ぐるみにうれしき色を奢負ひてかへるも一

興なるべし。嗚呼此巻やさきの洒落をさらりと流して、いま流行の眞つただ中、花元結の花々しき、句案に磨く玉揃ひ、娘ざかりの十七字イヨ浜々々賞ておくべし
文政祭末秋 柳亭種彦誌
七十八編序
川翁の流れ今に絶えず、柳の梢ますく茂り、上は鳳凰に桐の御紋を寄て祝し、しもは田樂長屋に味噌こしを對して興すめり、居候のまゝならぬをかこち、下女の物知らぬを笑ひ、姑のかたくななる、嫁のものを恥る類は昔が今にかはらねど、趣向は日々新しく、かつつとぬけめは内証事、人情の店おろしに、ばつちばちつもありあがたる七十八編、かの宗因が口がるも、おさお

血圧降下には

アーグレミン

血圧アクトホルモンとアミン製薬

山之内製薬

さ劣らず江戸をもつて鑑とすべし。花屋の樽柳に縁ある、種彦しるす。

七十九編序

(文政七年、四十二歳)

千彌染は名だに知らず、市松すたれて、三升格子大和屋紋りにけおさとけん、小太夫鹿子の噂も聞かず、團扇の如き京うたも名護屋の細きにさしかへて女の髪のがりさがり、時の相場の狂ひより、流行ともいひはやく、されども構はタイマイに止り、緒じめは珊瑚の外を求めず、肴は江戸前、生諸白、花は三月月は秋、前句は柄井川柳が風調にしくはなし、故に昔が今にもてはやすことは珊瑚に比して恥ぢず、日々に浮世の穴を穿つて人の噂の七十五日に四つまたつた七十九編。嗚呼盛んなるがな盛んなるがな

文政甲申夏 種彦序

この連続三編の序文を見ると、常に初代川柳の風を慕ひ、前句の本筋を示唆して、博學をふくむ妙文は、四世川柳もタジ／＼であつたであらうと思はれる。続いて文政七年九月十二日に四世玄机披露に際し、四世が頼んだであらうと見られる八十二編の序文を書いてゐる。

八十二編序

ここに酒あり柳樽に湛えたり。彼の鬼貫が伊丹のかる口に勝るは新川ならぬ浅草新堀

川柳が醸して世の人に涎を流させしよりこのかた、其杜氏

柳川の名を継ぐ者三世にして酒造のことを廢す。今眠亭賤丸よく其術に長たり。ゆゑに樽次底深におさらぬすき人等賤丸をすゝめて四代の杜氏川柳とあふぎ、河内屋が奥藏に名びらきの蕨をまうく。集句は一万に余り、数百人の連衆高樓に居流れたり。干時文政甲申秋九月十二日の曉天いまだ星の消えざるに、開口文台に向ひ、樂評加評の数巻を披露し、日没を燭に次ぎ、とかくして川柳が選める巻を吟じおはる頃は、十三日の朝鳥東天に輝けり。嗚呼此道の廣き事武藏野にや比すべきびつくり丸にや譬ふべき。若し小原のせばき心もて、蜂龍のさし合をいふ者あらば罰盃三杯を盛らんと、新連の荒走り木卯と替名せしえ作者種彦順の舞にうかれ出醉中に漫書す。

八十三編序

此編は四代目川柳名びらき大会の続なり。大序を見ざれば二番目の筋が分らず、味噌吸物で腹をこしらへねばうしほのうまみの知れぬ類にて、前編を求めたまはねば流行の筋が分らず、風雅のうまみが知れぬなるべし。ゆゑに八十二編に三編を次ぐ狂言の大意を見かけつけ三盃の未練をいはず、初よりばうだらになり給へど柳樽の口をひねつてつ

ぐ 木卯

この序文は文日堂の題辭と共に、四世川柳を支持するに充分であつた。尙版元の提灯持もしてある。そこで五世川柳名弘の序文もやはり種彦に頼んだのであつた。

百四十六編序

(天保九年正月、五十六歳)

川柳の名を継で五世となるものは誰ぞ。佃島の佃なり。所のさまも須磨に似かよひ、明石町へも這ひわたる程なれば、香の図の焼印押たるはんだいとかいふ魚桶に、源氏物語をとり重ね、せわしき物師走の月に枕さうしを操ひらけど、且に日本橋の市に立ち、夕には算盤帳面を側に置き、活計更におこたらす、其暇なきうちに彼書を読み、狂句を吟ずる事数年、昔堺の藥種屋が宗祇を請ぜし連歌の席にて、胡椒三文科にかけて賣たる類、実に風雅の人にしあれば、先生と崇められ、宗匠と尊まるは、原來願はぬ事なるを、四世の川宗故ありて其名を譲るに否みがたく、佃子の諸されたるは、いはゆる以心傳心なり。かく名聲にかゝはらぬ子が性質なるにより、別に大会を催さず、唯月並の会を評して名を継ぎたるよしを披露す。そのことわりをこゝに記すは、彼の香の図に因

ある

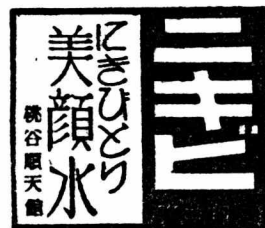
修紫の作者柳亭のあるじ種彦なり

こういう風に柳樽の序文を書いてゐるところから案じて、当時宗家川柳を除いては、狂句界の第一人者であつたといへる。又この頃が「修紫」に油の乗つてゐたのであらう。

選者としても名選者であつて、八十編からすつと選評をしてゐて、天保四年正月「木卯」を花菱に譲つてからは、二世木卯披露の百三十三編と、株木主催の壽筵会の百四十三編だけに選が見える。特に選者として異例のことは、柳樽全編を見て時の宗家川柳が、他の選評をうけることはなかつたのであるが、只一回文政十三年二月 鳥越明神奉額に、柳亭の選評中に

たち花を氏子にほしき御神体 川柳

の一句が百十六編にある。これは正しく四世川柳であり、空前絶後といふことで、柳樽を研究する上に於て重大なことである。又川柳が一目置い



てゐたことも想像出来るであらう。種彦の句は柳樽を通じて約三百句ある。そのうちから厳選採録してみよう 煎じ様つれの身でなく後家はのみ (八二)

麻生路郎著 水武書房版



刊新最

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書 本書は著者が多年のウチンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して収むところ三十七講、平明で親切で、初心者も本書を讀くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

B 6 版 二二二頁 定價 一〇〇円 送料 金三〇円 取次御注文は 大蔵市住吉區大蔵五丁目二五番地 川柳雜誌社 電話 〇四七五〇五〇

鬼灯のかんごを吹く糸切齒

(八二)

鶴菱の羽風張子の首が飛び

(八三)

十三里帰つて琴の師匠なり

(八四)

その上に針だこもあるい

(八五)

女房

(八六)

医者も古句と宗匠に化けて

(八七)

行き

(八八)

からうじてのがれ羽織の紐が

(八九)

なし

(九〇)

明朝風は堅裂のしきうな字

(九一)

くばいとこへ水たまる孝登五

(九二)

後朝の文にわすれた煙草入

(九三)

縁の下老眼でなをばかざらす

(九四)

おつ取刀で柏餅をくんな

(九五)

二十四歳たる白歯で矢場へ

(九六)

出る

(九七)

残つた錢は大坂の弟くじ

(九八)

手柄話へ鎗を出す士用干

(九九)

佛師屋の蚊やりおりく

(一〇〇)

香い

(一〇一)

竹馬で追打にする赤とんぼ

(一〇二)

尙薬も紅絹でくつた猿屋町

(一〇三)

からめ手に間道のある女医師

(一〇四)

どうかは確かでないが、その
若旦那らしい画像から推察し
て、帯刀であり、いつも種彦
と句会に同席してゐたこと
や、柳亭選に「翌の下鉢花嫁
の岩清水」の作があること等
より、息子とも女婿とも思は
れる。文政十年七月にはじめ
て選評をして居り、天保四年
つて次第に上達、天保四年正
月に二代目「木卯」と改名し
てゐる。その四月には櫻木連
で改名披露句会があり、十二
月には自ら主催の句会を催し
て、川柳も静丸、佃も出席し
てゐる。百二十九編(天保四)
と百五十一編(天保五)とに序
文を書いてゐるが、その文章
は到底種彦に遠く及ばないの
も当然であらう。天保五年版
の「川柳百人一首」には当時
一流の狂句師として名を連
ね、「櫻木連燕亭木卯」とし
て「かいぐりをしあけら櫛の
毛をまるめ」の自選の句があ
る。花菱から木卯を通じて九
十一編から百六十七編まで十
三年間続けて達吟を見せると
て、柳樽がなくなつても尙狂
句界に続いて活躍したと思は
れる。その多くの作品の中から
目についた佳句を拾つてみる
と次のようなものである。

男の鳥追吉田屋の見世へ来る

(一〇五)

合の手に舌打をするきりぐ

(一〇六)

太棹はちとそぐなわぬ淡村屋

(一〇七)

櫻と橋飛車角行の所へ植え

(一〇八)

粥を喰ふまでは寒さを知らぬ

(一〇九)

義士



柳川 千生瓢箪(上)

——太閤の馬印——

阿達義雄

馬印難波の町の名にのこり

(柳多留 三編)

——瓢箪町は大阪の遊里、

新町中の一坊。

秀吉が晩年に築いた伏見城

は、後世、桃山城と言はれ、

美術史上、桃山時代とまで謳

はれ、それは豪壯・華麗・雄

渾等と特色とし、画家に狩野

永徳・狩野山樂・海北友松、

彫刻には左甚五郎を駆使し

て、秀吉の好尚を残したのも

ではあるが、川柳子の着眼は

少し卑近で、

馬印千なり桃でいふりくつ

(柳多留 三編、七編)

秀吉の綽名は猿であるか

ら、千生瓢箪よりも、千生桃

が丁度よいとの揶揄である。

花の山此瓢箪はむま印

(七編)

花見に持つてゆく酒を入れた

瓢をたゞ斯う言つてみただけ

のものであらうか。

紋も瓢箪大阪で當てる猿

(二〇編)

——本当は馬印。猿は

秀吉。

軍瓢のつる竹中へからみ付き

(四六編)

美濃の軍学者、竹中半兵衛

里治は、初め齋藤龍興に従つ

て居たが、意見が合はず、走

つて織田信長に属し、秀吉に

直屬して軍務のことに当り、

秀吉をして幾多の功を立てさ

せたのであつた。

瓢箪で鯨江の城をおさへられ

(九編)

世に、つかまへることの出

來ぬこと、又は要領を得ぬこ

とを、瓢箪で鯨を押へる、略

して瓢箪鯨とも言つてゐる。

この俚語をも顔色ならしめ

たのは秀吉であらう。鯨江は

江州にあり、小倉備前守実治

の居城で、後になると六角義

賢・義弼父子が之に頼つて入

城し、共に天正元年迄、織田

信長に反抗し続けて居たので

あつた。信長の命を承けて永

の間攻城に當つてゐた柴田勝

家も、すつかり攻めあぐんで

手を焼いてゐた時、即ち、天

正元年九月、援軍として來た

羽柴秀吉の爲に、流石の鯨江

城も陥落させられて了つた。

瓢箪の留守に桔梗の花ざかり

(九編)

天正十年六月二日、明智光

秀の叛逆によつて、織田信長

も遂に都本能寺の露え消え

た。この頃、信長の命により

中國の毛利氏と相对峙してゐ

た秀吉は、急遽馳せ戻つて山

崎合戦となるのであるが、そ



頸をためらうつかる

聞 右 田 淺

★ ★ ★

頸白目出血はない自殺死体
之は句になつていないいだら
うが、刑事諸君が現場で首つ
りを見た時覚えていて欲しい
文句である。自分で首をつつ
た死体なら頸のヒモのあと
も、眼の白い所にも出血乃
至溢血点が出ないのである。
所が絞殺してから首つりをよ
そおつた死体では頸のしめあ
とも眼にも出血乃至溢血点が
あるのである。
殺すつもりではなかつた
が、抵抗したのでツイ殺して
しまった。平素からよく自殺
したいと云つておけば絞め殺
したとはマサカわかるまいと
知恵に考えるか知らぬが、法
医学はその手はくわぬ。
大体くびしめとくびつりと
ではヒモの方向が違ふ。くび
しめは水平に、つまり頭から
足への軸に直角に力が働く。

くびつりではこの縦横に平行
に力が働くわけだが、障礙物
のために斜上方に働くこと
になる。頸には二種の動脈があ
つて頸動脈は表面に近く、お
さえるとも動脈がふれるが、も
一つは椎骨動脈と云い頸の脊
柱の骨の横突起の中央の穴の
中に保護されて上走するから
縦軸に直角にいくらしめても
圧迫を免れる。だから絞殺の
時は頸動脈は血行がとまつて
も椎骨動脈の血は頭へ上つて
行く。従て顔も鬱血し、眼にも
出血する。頸の方は通例ウシ
口からヒモをかけるなりギユ
ツとしめる。一分位するどビ
ク／＼痙攣し失神しそのあと
ダニヤとなる。然しまだ血は
通つてゐる。その時にヒモを
一旦ゆるめて改めてしめなお
しかたく結ぶのである。この
ゆるめる時に充血する。あど
でしめる時出血する。首つり

では奥の椎骨動脈が第一頸推
の所で骨の外側へ出て少しタ
ルンでそれから頸の中へはい
る、この所で斜上方に向うヒ
モによつて圧迫を受け血が通
わなくなる。それで首つりで
は頸へ行く動脈が悉く血行途
絶するから顔も脳も忽ち貧血
し出血など出来ない。又頸は
おしつけられた所は血管の中
の血も逃げて貧血する。その
まゝ死んでしまふ。死体をお
ろしてヒモをはき出してもモ
ハヤ血が通わないうから出血の仕
様が異なる。生きている間に
すど出血がヒドイ。
又この頸貧血は首をつるや
四／＼秒で已におこるらし
い。だから同時に失神する。
戯に首つりのマネをしても忽
ち失神するのである。
所が頸をしめる場合はそ
う早く失神しない。頸は寧ろ
鬱血する。頸動脈が圧迫さ

れるが椎骨動脈は圧迫を免
がれてゐるからである。頸は
犬猫などでも筋肉の二十二倍
の酸素を費すと云われてい
る。筆者の所で家兎について
研究してもやはり酸素の消費
が著しく、絞殺すると頸の酸素は氣
管だけを閉塞した時よりも減
管が遙におそい。之は頸の血
管にある特別の神経装置（頸
動脈洞及迷走）を圧迫するから
である。この装置を初に圧迫
するので手足の血管が収縮し
て血は頭に集り、手足での酸
素消費を節約し、頭の消費に
備へるからである、だから絞
殺の時は頸は一分位は失神し
ない筈である。一分グズ／＼
／＼したら死ぬのだ。此間に
必死の抵抗したる活路が見出
せるのだ。防禦よりも攻勢に
出で加害者の頸、目をつくが
よい。必ず敵がひるむ。モウ
しめたものだ。

れ迄の間、桔梗紋の明智の天
下で、いはば、桔梗の花さか
りといふ処である。
小栗柄の竹を手にして飄延び、
蔓草の飄蕩故に、竹を手に
して次第に繁茂して行つたと
なる。本能寺の悲報が一度秀
吉に傳はるや、中國遠征中の
秀吉は、直ちに毛利氏と和を
講じ、引返す筈々山崎の一戦
に於て、明智の軍を打破つて
了つた。光秀は遁れて小栗柄
の田舎道にさしかつた時、
道傍の竹藪の中に要したるた
士民の竹槍に刺され、槍鏑に
もならぬ非業の最後を遂げた

のであつた。時は六月十三
日、光秀がその心事を重臣に
打明け、兵を動かしてから僅
かに十三日のことである。こ
の士民の竹槍こそは秀吉の力
の天下遍く延びゆく最初の手
ともなつたものである。
『柳多留』には賤ヶ岳關係
の千生飄蕩の句は見えない
が、嘗て鈴木蕪山翁は次の様
な句と解を發表されたことが
あつた。（『古川柳研究』卷三ノ
三號）
飄蕩に睨まれ駒はあとしきり
（新八）

「賤ヶ岳の合戦に、佐久間玄
蕃允盛政が、秀吉の本營に切込
み、秀吉から、喝んで睨みつけ
られ、人馬共に動かなくなつた
話。昔の武者絵などに能く有る
岡で、……左に太閤記から其一
節を抜粋する。
筑前守、尾目に見て少しも威
がす、玄蕃允推参なり罷り退
け、と云つてハタと睨めば、
玄蕃が乗つたる鹿毛馬、前足
折つて覆き倒る。強ひて馬を
引きし、一步なり其前へ出ん
とすれば、馬は只しきりにし
さる。後へ向ふすれば喜んで
走せぬらんとす云々。
飄蕩は秀吉の馬標、此句では軍
に秀吉の意。駒は盛政の乗馬。

「駒は「飄蕩から駒」の諺を利か
す。」
ひやうたんできん鳴りのする
馬印
——黄金の千成飄蕩で
あるから。
飄蕩の義がきまつて重くなり
飄蕩の連だん／＼とぶらさが
り
飄蕩がぶら下るのには当然で
あるが、「運がだん／＼ぶら
さがる」となると、何かしら
不吉の兆が伴ふ。この千生筆
瓢を枯らす主なる原因となつ
たのは、秀吉が文祿・慶長二

度に互つて朝鮮に出兵して、
多くの國帑と人間を失つたこ
とであらう。

品質優良

先 ン
ン ビ リ
ベ 針 ム ク ツ
セ

立川ペン先株式会社

上 野 市

いのちある句を創れ



投稿清規

用紙は原稿用紙文字を正
確に開月日及場所記入
切毎月廿五日投稿先本社宛

新春川柳會 (本社)

二十四年一月九日十三時
於 一運寺

宵戎の午後、華やかに新春句會の幕を
切つて落した。今年はいんと作句に精進
することを誓ひ合ふ。各支部代表の作句
競争や、余興に放送などあつて五時
すぎ芽出度く散會した。

出席者 一路郎・靜一路・南風郎・文蝶・
竹莊・紫香・里十九・鮎美・茂勝・更
生・星登・案山子・島莊・綠雨・雅美・
香林・正司・青丹子・古方・葉平・好郎
没食子・史葉・翠光・小松園・種美・
生々庵・斜水・浪花・愛論・万よし・
醉月・良祐・菜・水客・悟郎・アト・
淡舟・潮花・美水・霞乃・リリ

兼題「年賀狀」 麻生路郎選

燒跡へ戻つたと言ふ年賀狀 普天
旧姓を想ひ出させる年賀狀 葉光
幾年振りドット舞込む年賀狀 孫拙
儲けたの年賀へ電話も刷つてゐる 南風郎
年賀狀だけがきつちり二十年 香林
ローマ字の賀狀を母もあやます 水客
年賀狀小娘だけに二三枚 鳥莊
こちらこそ出さねばならぬ年賀狀 登
謹賀新年金は返すと誓ひてなれ 好郎
匿名で来た年賀狀見付けられ 醉月
年賀狀子供に智恵も借りて読め 更生
年賀狀妻は達者な筆をもち 案山子
或さんで逢ふて賀狀の札を云ひ 菜
年賀狀来れば来ないで淋しがり 香林

年賀狀紙も切手も値が嵩み
さういふ事を思に落る年賀狀
温泉の葉書で書いた年賀狀
年賀狀妻にも趣味の友があり
二号邸に来るはホテルの賀狀なり
恐縮のしはじめ年賀の返事書き
年賀狀さつさり貰つた寝正月
留守宅へともかく賀狀出して置く
面識もないのに候補者賀狀くれ
疎開から年賀狀だけの仲になり
年賀狀差出人の名だけ読め
如才なく二号宅へも賀狀出し
年賀狀の主に出会つた神詣で
饒食科来いと云へぬ年賀狀
幸福の絶頂にある年賀狀
墨こんりり故人の賀狀をつかひ
年賀狀文句はヤツパリ堅いま
何を血迷ふ大晦日の賀狀
賀狀一枚余つて出しとくだけの仲
賀狀なんぞ賀狀なんてごニヒスト
誰も居ぬ事務所に年賀狀が散り

兼題「トランプ」 中島生々庵選

トランプを振袖重れた膝に置き
トランプに無口の人はい笑ふて居
トランプの一人占ひ風ある夜
トランプの羽織の模様よく喋り
ひとり居ればトランプひびきの音を立て
待人占ひトランプするパーの隅
失態になつてトランプ引き割かれ
トランプで占ふ日あり國病記
トランプへみかんの音がして来る
トランプが散らかつたまゝ寝正月
御妾の愚痴をトランプ聞かされる
トランプが國旗に変わるあざや
トランプへ老母は一人置きたつ
怪奇篇ダイヤの3が信きたつ
マニエエトランプに自惚あの手つき
天勝がトランプ持てて生きて居る
相手なしにトランプ小半日
トランプも持つて女を連れた旅
トランプの灯にぬく温くと許嫁
集篇をトランプ文句が散り

トランプの通り靴の音の響
トランプが見合と知つて負つて
美しき意地トランプに続くなり
トランプへ末つ子しんぼりはつた

席題「初風呂」

初風呂で飲む約束をして帰る
初風呂へ薪惜げなく燃し
初風呂でもう飲む話食う話
初風呂でいよいようまいおばんや
初風呂の湯氣の熱いさへ寄り
初風呂で年賀言つて顔なじみ
初風呂へ老母も巻いて出かけ
初風呂に浮かすオモチの御年玉
初風呂でびくびく聞く羽子の音
初風呂へ常着で行つた子供たち
初風呂は皆んな苦勞を知らぬ顔
初風呂で日本髪がよく目立ち
初風呂の湯氣まつすぐに顔へ
初風呂でまた税金の小言聞き
初風呂を出ればお燗の出来た声
初風呂は恵比須のやうにおいで
初風呂の子にかこまれた湯の高さ
初風呂で桶が轉んだにぎやかさ
珍客が来て初風呂へ呼びに来る
初風呂に今年こそはの顔が浮き
初風呂の湯気の熱いさへ寄り
初風呂の父へ末つ子つて来る
初風呂へ寝巻のまゝういて来る
初風呂へ隣りの隣居もういて来る
初風呂で自己宣傳よく喋る
初風呂は湯のある内に戻つて来
子を連れて来て初風呂のいそがし
初風呂で互の妻をほめてゐる
初風呂の父と子シャボン泡をて
初風呂へ酒の匂ひもつて行き
じつと眼を閉じて初風呂アゴを
初風呂の湯気に抜毛ふと見付け
席題「花道」 水谷竹莊選

道行は花道へ来て着る手になり

花道のライトに若さ浮出され
花道を映しと踏んだ幸四郎
幕合の花道迷子さうげられ
花道へかゝると雪はやんで居り
花道をヘッドライトは追つた
花道で日本一の名言詞
花道にかゝり給の様なその魅力
花道へ雪を残して幕となり
花道は足袋の白さを見せて立ち
花道を歩く藝妓の芝居めき
花道を三度笠が走り抜け
花道へごつと揃ふた花四天
早変わりもう花道を走つて来
花道へ固唾をのんだ眼がすわり
花道でライトも光る名演技
まだ見えぬ花道音がかけられる
花道の七三へんで見得を切り
花道が要らない今日は浪花節
花道のしぐさが見たし立見席
花道で敵同士が擦れ違ひ
花道を盗いしぐさに通りぬけ
花道の恋ひたいの顔がはつきり
花道を待たれた山良之助
花道で見る音羽家はさす年
花道へまでも湯場は持ち越され
狂乱は花道からの紫となり
舟と寵恋の花道野崎村
金びよば花道からの顔を待ち

二月の會 (本社)

二月六日午後一時
於 一運寺

開會前から句作に熱心な人達が詰めか
けて回を重ねる毎に白熱されてゆく。路
郎主幹は「偶話二つと川柳」と題して柳
話をされた。席題兼題披露後、里十九氏
の案案で句會人の樂屋落の句を作り爆笑
して散會した。
出席者 一路郎・鰻牛・平・青丹子・南
風郎・文蝶・鮎美・吾椿・一郎・香林・
靜一路・里十九・万の・すゝむ・丁路・
兎子・愛論・更生・綠雨・美水・岸柳・

雪空に葉がぬくいと 話
雪空にこもくだつせと車来る 種美
雪空へ開うやうに屋根を弄き 香林
雪空の常盤御前が出そうな日 古方
雪空を母乗換へて 万葉
信心の鼻へ粉雪まつすぐ来 水客
寝息までカストリ奥の親爺なり 愛論
バラックの寝息が洩れてる月夜 春夢草
起されば寝息へお茶が吹く 萬葉
子のために生きたる子は子の寝息 幽王
相宿の寝息しん 雪が降り 水客
曉に死線を越えた寝息きく 葉光
餅やいてるに寝息うかがうて 白柳子
大往生スヤ 寝息きこえう 里十九
子の寝息内職の手をやすめない 豆秋
大寝息小寝息足袋のツギをする 貴山
三等車寝息閑屋の姿にて 水客
置手紙寝息へ換たてられる 案山子
口あいて母は淋しい寝息なり 香林
寝息もう時を越したやうに見え 同路
これでもお嬢さんかと云ふ寝息 同路
明日かたき討つとは見えぬ寝息なり 同路

川 北大阪支部創立句會(大阪)

一月十五日十三時
於 連正寺

北・宿・白・糸・過去・塔・
盛装・小正月・玄關・押花
北風も何んのノノと共寂 里十九
わりかんで出れば北風まともに来 万葉
北の空眺めて傘は置いとこう 乙平
井支まだ妻のこころのなかで生き 潮花
炭を焼くけむりか北の國境 同路
子が五つ北のたよりがまだ来ない 同路
北の國あのかたくな父が住む 同路
風呂あり書いた宿屋の方に定め 同路
宿帳へ先づ風呂の事酒の事 修平
宿帳へ一人にまかせお湯に立ち 良香
宿帳へ亭主け心得顔で書き 金子
木賃宿商賣道具と共に寝る 静一路
書置の最後は宿へ詫びてゐる 花村

一人旅宿のれすみか氣にかゝり 更生
白足袋の白き老嬢まだ老いず 萬葉
眞白いドレスヘリードの手がよへ 鳩花
昔々白紙で出した委任状 香林
もつれてる糸ひきうる眼鏡かけ 乙平
糸切った魚は仲間が幅がきく 葉光
糸屑を取る手触れたい襟え伸び 平
復員の夫へしつけ糸をぬき 平
三味の糸ゆるめて浪花節になり 萬葉
糸屑をとつて貰つて仲がよし 香林
靴磨過去を知つて人が立ち 香丹子
飲むほごに 過去を語り出し 里十九
近ごろは基客ばかりの過去の人 萬葉
ひそくと女將の過去を話し合ひ 花代子
銀狐過去に触れると横を向き 香林
宿を出て曲れば塔がぬつと立ち 同路
思ひ切り下つてカメラ塔も入れ 同路
塔見えて牛の行くのも雲なり 萬葉
窓を開ければ塔のぼやけた京の宿 同路
盛装の娘は流し目で見られ 良子
盛装の口を開けば里が知れ 香林
盛装は顔とは別に褒められる 木星
斜になつて盛装車を出 平
盛装ヘスナツツ写真待機へ 香丹子
盛装で酔へない会と知つて出る 案山子
盛装で出るに近所の目をのがれ 白柳子
盛装の銀行先たすれられ 南風郎
盛装が寝ころんでる松の内 聖山
かづますす脱いで盛装ホツトし 水客
盛装の今宵おとめに別れる灯 鮎美
小正月小雪チラチラするもよし 鮎美
小正月かび生えかゝる餅を焼く 若菜
おめでたうも早何となき小正月 若菜
酒もちと買ひ足しをして小正月 潮花
小正月夫は軸をかけたかへる 萬葉
玄關でエプロン掛けたまゝ迎へ 鳩花
玄關で集金人は巻煙草 鮎美
玄關へ今日呼ぶ声のこたます 香林
玄關へ今日吉日の花を活け 花代子
玄關へ旧家の昔でしめられる 香丹子
開つばなしの玄關となる臨終 萬葉
玄關の袋配米と知れ 萬葉

川 あざみ婦人句會

伊藤定美 報
憶れ・約束・日記

玄關一つばいになつてゐる乳母車 古方
玄關は吉報を待つ坐りよう 水客
我が恋に似て押花の色もあせ 萬葉
押花もしてこの旅を終るなり 良子
押花のやつぱりあれは恋だつた 若菜
押花の趣味も淋しい女でい 香丹子
お姉様なぞとフアンの手紙なり 梨里
あこがれて来れば田舎の淋しさ 花代子
海越えてゆくあこがれをなだすや 花美
白ばらの君と名づけて女学生 樹市
約束が違ふとこわい顔になり 樹市
若し雨が降れば映画ときめて置き 若菜
日記帳わが青春が生きてゐる 若菜
日記では逢わぬ事になつてゐる 良子
もう窓の端に顔を出る日記帳 美智子
残された日記に親の愚痴が出る 樹市
接吻をしたとは日記書いてない 美智子
日記帳ばらばらに子らは遊び 一枝
日記帳入江たか子がはられてゐ 津矢子
若勢など知らぬ日記の文字を見る 揚南
御近所も大阪弁のなつかしさ 揚南
愛嬌もなく御近所に住み馴れる 定美
近所まで来たとなつて寄つてくれ 良子
近所だけ挨拶をして越してゆき K子

川 大牟田支部句會(大牟田)

一月廿日 宮田一葉 報
腕組み・困難・沢山・迷惑・
門・座布團・三代

二十の扉解けない儘の腕を組み トンボ
腕組みをヘッドライトがひきはなし 鮎牛
腕組んで来た経済は開かぬ肚 凡生
分家して見て世渡りの難しさ 水泡
財産はこれだけだと子沢山 一葉
寄りなさいとも言はれない子沢山 青史
子沢山だから土産へ思案する 野牛
迷惑な話さのろい聞かぬいた ツネオ

川 久賀支部新春句會(山口縣)

一月十八日 於 路三居
破・拜む・餅・針巻・雑詠

合住い機両方から破れ 白星
破れ障子立てゝあともつゝがなし 笑月
落ちた皿首をすくめた台所 三休
拜まれて縁とは云へぬ金を貸し 猪太郎
拜んでも 帰らぬお父さん 笑月
子の拜むたんびお供え減つてゆき 猪太郎
餅だけはついてやうたい子 寝顔 猪太郎
針巻を締めて殺されに 役者 路三
お祭のチツツヤイ針巻泣いて 路三
針巻がチツツヤイ針巻泣いて 路三
の想おらん派手に締めて 浦東
針巻もタオルですると味がなし 三休
針巻ではたいお茶へかしこまり 三休
じばらくはふちの温り待つ火針 猪太郎
税務所の目に俺までがもうて居 三休
日向ぼこ祖傳湯足りた背が見せ 路三

川 備前支部句會(岡山縣)

十二月二十六日 於 久米雄居

金づまり 金づまり
金づまり三千五百億とかや 久米雄
金づまり今日も配給ごつと来る 五九童
金づまりいわけの山を見て通り 一葉
背廣服同志が話す金づまり 桂花
金づまりとは言ひつゝ花を活け 正洲
消息が裏床にもある金づまり 久米雄



編輯室にて

▼暖冬異常で騒ぎ、彼岸過ぎてからの寒さで一才騒いだ、ソロンロ本格的な春がおとづれて来た▼我が社では、四月二日は市政六十周年記念川行会を開催して大阪市民としての敬意を表し、十七日には香具山吟行を挙げて明期な

川柳生活を確保し、五月八日には「ステート・フェア全川柳大会」を開いて、人間陶治の時としての川柳を大衆の心の底へ焼きつけたと思つてゐるので特に御協力が願ひたい。▼前号を二・三月合併号として出したことをお詫びする。原因は本誌の印刷所へ官廳の年度末の大量印刷物が殺到したためである。▼本号の読物として「金錢を詠んだ川柳に就ての座談」を生々庵、鮎美、豆秋、文蝶、錦風、瓜平と私の七人でやつた。▼古川柳畑の研究物では富士野鞍馬氏の「柳樹と柳亭種彦」と阿達義

動・静

▼本社二月份会は六日午後一時から一運寺で川柳雑談支部句会は二月八日と三月十五日午後六時から生々庵居で川柳雑談支部句会は二月十九日と三月十九日の午

(路)

日本スポーツフェア大展開

朝日新聞創刊七十周年記念

増産に勵む我等が春の祭典

4月19日→5月31日

2月25日より 福引付割引入場券発売開始 ¥60.

☆特等 メーヌウェスト機に依る **アメリカ旅行招待**一週間
(但し自由渡航が許可になった場合)
又は **現金50万円**

其他 輸入道具・牛・現金5万円・豚・映画スター参加旅行(2日間)等 12,200名

前賣券發賣所 各新聞販賣店・近鉄各名所・大阪市百貨店・プレイガイド其他

主 催 朝 日 新 聞 社

於 近 鉄 沿 線

あやめ池遊園地

趣味と教養の殿堂

松坂文化クラブ

會員募集



松坂屋

大阪日本橋
電用一七二番

● 目 録 ●

● 演 道 (小原流・末生流)
● 茶 道 (表千家流・宗義流)
● 洋 裁 (流・花月流)
● 舞 曲 (舞臺・日本舞)
● 手 藝 (古典・新舞踊)
● 長 唄・小唄・謡曲
● 服飾デザイン

詳細お問合せは
七層文化クラブ事務所へ

清談・商談・お待合せに

喫茶 みどり

上六交又
点西北角

後六時から王子神社で▼南海電鉄川柳会は三月廿三日と三月廿三日の午後四時から▼南区医師会文化部川柳会を二月十七日と三月八日の夜大室文化会二階で▼扶桑金属川柳会は二月十日午後四時から▼大阪通信病院川柳会は二月廿六日と三月廿六日の午後二時から開催、以上何れも路郎主幹出席。▼川柳ハワイ支部二月份句会は廿七日に商工会議所楼上で近く母國訪問の流水送別句会として開催された▼本社三月份句会会場を中央部に移し、三月五日午後五時半から島之内の大宝文化会館で▼交通局川柳会は五日午後一時堀川の交通局で▼関西配電川柳会は十九日午後二時から難波配電局四階で▼交通局春日出川柳会創立句会が廿日午後一時から春日出車庫の寮で開催、以上何れも路郎主幹出席▼仁江川柳美松吟社(愛媛縣)創立二周年記念句会は三月十三日に開催▼吉田笙人氏は「壽郎報」を刊行された。(壽郎は愛息の名)▼壽郎を詠ふと題し百余句を収めてある。佳吟に富む。四六版一九頁実費三五円、福島縣飯坂温泉▼川柳私社は大坂市阿倍野区昭和町西五ノ七に移轉▼深井凡々氏(奈良縣)は海外引揚者の連絡とその生活の安定を目指して、「むつみ」を刊行して来たが、殆んどその目的が達成されたので二十号限りで廃刊を断行された。凡々氏の労を多とする▼大島清明氏(熊本市)の三男榮夫君が一月二十七日永眠された謹悼▼木村草々氏は大坂市生野区猪野中一丁目一條市場内へ轉居▼宇和川木耳氏は大坂市阿倍野区播磨町東一ノ三三へ轉居▼津田千舟氏は一月廿日に千石莊へ再

募 集

課題吟募集

高利貸(十句) 須崎豆秋選
(五月五日締切)

ミシン(十句) 夷一笑選
(六月五日締切)

毎号募集

近作柳樹雜詠廿句 麻生路郎選
川柳塔(雜詠) 麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樹」は一般作家の雑吟を募る。
▼「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

川柳雑誌

B列5号 毎月一回一日発行
第四卷 第三号

一 册 金二〇円
(送料二円)
半ケ年概算 金一三三円
一ケ年概算 金二四四円
(昭和廿四年三月廿五日印刷)
昭和廿四年四月一日発行

大坂市住吉區萬代町五丁目二番地
行印刷所 麻生 幸二郎
發行所 **川柳雜誌社**
大坂市住吉區萬代町五丁目二番地
電話 大阪 七五〇五〇

入院され千原庸司氏と同室だそうである。